

宮原 一武 著

『文明の構造と諸問題』（近代文芸社、1998年）

横山 玲子

本書は、日本比較文明学会の機関誌『比較文明』掲載の論文、および国際比較文明学会における発表を骨格として、(1) 文明を形成するものは何か、(2) 現代文明における諸問題は、何に起因するのか、(3) これからの文明はどうあるべきかを論じたものである。宮原氏は、「文明は《言語》と《通貨》によって形成される」という仮説を用い、これら3つの問題に対する具体的な解答を提示している。

著者は、文明の構造を捉え、その形成を論じるにあたって、文明について次のような定義付けを用意する。「文明はまず初めにヒトの内部に「教養」として醸成される。それが対外的に現出すると「文化」になり、さらにその文化の中の主要な文化、あるいは指導的な役割をする文化は「文明」になるのである。そして一つの地域あるいは一つの民族によって生み出され、形成された文化の総体・統合体もまた「文明」として認識されることになる」。文明の一般構造は、文化システムの一般構造に、それを担う「ヒト集団」と、「ヒト集団」が依存する「自然条件(自然システム)」を加えたものとして理解することができる。また、個々の文明は、それ自身で自己完結しているのではなく、何らかの形で外部に依存していることから、「他文明」との関係性もこの構造のなかに取り入れて考える必要があると言うのである。

宮原氏が示す、文明の一般構造の基本となる文化システムとは、文化と「言語あるいは言語的要素」、「通貨あるいは通貨的要素」、およびこれらを規定し社会を運営していく「政治機構」との相互関係によって成り立っている。「言語あるいは言語的要素」とは、モノ、コト、思考など、人間の考えや感情を表現できるものすべてであり、人間の精神活動を具体的に担当する構造部分である。また、「通貨あるいは通貨的要素」とは、財やサービスなど、交換に使われたり、価値の数量を表現するものすべてを含んだものを言い、物質的活動を具体的に担う構造部分である。国家、都市、地域といったひとつのまとまった社会は、これらの構成要素によって成り立つものであると、著者は考えるのである。

第3章から第7章までは、現代文明が抱える諸問題は何に起因するものなのか、という第二の問いに検討を加えるものとして捉えることができるだろう。第一にとりあげられているのは、都市文明が環境破壊をもたらすという問題である。著者は、文明は必ず都市を造るという立場に立っており、この問題も都市との関連で論じられる。都市においては、通貨がもっとも多く流通することから分業が成立し、多くの専門家が豊かな言語を使って生活する場となる。また、言語と通貨が流通するための交通・通信手段が発達し、他都市とのネットワークを形成することになる。さらに、大量のヒトが都市に集住することで、さまざまな都市問題が発生し、なかでも最大の問題が環境破壊となる、と言う。第二は、国家文明は産業文明の発展によって、限界に到達したという問題である。つまり、自給自足可能な農業文明における文明の形成は国家内で完結していたが、産業文明が発展すると、国家という枠そのものが障害になってきたと言

うのである。このことは、グローバリゼーションという問題として認識される。第三の問題は、国家において形成された文明が、国家の枠を超えて他の文明あるいは国家へと移転し、その結果類似した文明が広がり、国家の壁を破ってある種の文明圏が形成されてきたことである。産業革命以後、ヨーロッパから各地へ移転した産業文明は、これらの文明圏を統合し、地球文明圏とでも呼べるものへと向かっていると考え、著者はこれを「国際文明」と呼んでいる。第四の問題は、この「国際文明」がどのようにあるべきかという問題である。宮原氏は、文明は言語と通貨によって形成されるという仮説に基づき、「国際文明」を形成する新たな言語と通貨の必要性を説いている。重要なことは、真の「国際文明」を形成する言語と通貨は、どの民族・国家にも属さないことであると言う。産業革命以来、「国際語」と「国際通貨」の役割を果たしてきたのは英語とポンドであったが、第二次世界大戦以後は、アメリカ英語とドルになった。しかし、一国家に属する言語と通貨には限界があり、国家の弱体化とともに「国際」的機能を果たせなくなるという問題点が指摘されている。第五の問題は、ヒト集団と自然との関わりである。著者は、農耕の開始が文明の始まりであると考え、同時にそのことが自然環境破壊の始まりでもあるとしている。農耕文明の発展は、戦争の頻発化、大規模化を招き、軍事力となる人口の増加が奨励され、結果的に環境破壊に結びついていったと言うのである。

著者が示す、今後あるべき文明の姿とは、これらの問題に対処しうる文明である。それは、生き残り可能な文明であると言う。この場合、生き残りとは、他者の犠牲の上に成り立つものではなく、正義と公正のともなった生き残りである。合理主義的価値観は、人間に幸福追求の自由を与え、豊かで快適な生活をもたらすと同時に、人口の爆発的な増加を招き、自然環境破壊は限度を超えたものになったと考えれば、これ以上、合理主義の価値観に基づく文明を続けることは不可能だと指摘するのである。これからは、人類の生命の持続、すなわち生き残ることがもっとも重要な価値観となり、合理性ではなく、精神的な充足により大きな価値を見出す文明が形成される必要があると主張する。著者は、この新しい価値観に基づいた文明形成を実現するためには、これまでのような男性支配型の社会ではなく、女性主導型の社会が必要であり、そのためには環境社会主義的な体制を確立することが必要であると考え。女性が主導権をもつ文明においては、より情緒的な、感性の豊かな文明が形成されるはずだとも言う。これまでに形成された文明は、ヒトと物との関係を濃密化する方向へ進んだ文明であり、その中に人間の幸福を見出していくものであったが、生き残り可能な文明とは、ヒトとヒトとの交流、あるいはヒトと超越者（神、仏）との交流が盛んになる文明であるべきだというのが著者の主張の要点である。

宮原氏は、人間の生命に価値を見出す、新しい文明の形成を訴える。合理性と物欲から脱却し、自然環境や精神性を重視する文明でなければ、人類は生き残ることができないと考えるからである。人類の存亡を脅かす深刻な環境破壊は、日々メディアを通して訴えかけられているにも関わらず、個人レベルでの危機意識はまだ希薄である。生き残り可能な文明を形成するには、根本的な価値の転換が図られなければならない。その方法を検討し、実行することが今後の課題であろう。